特選
日本PTA全国協議会会長賞
2022

第55回「おかねの作文」コンクール

「貨幣」という文化

山梨県・北杜市立甲陵中学校　3年　吉村　和夏

私は毎年、初詣に行く。冬の澄んだ空気とやわらかな日差しで、鳥居の赤は一層鮮やかに、特別に見える。そんな元日の神社が私は大好きで、年に一度の初詣は私の楽しみだ。「ご縁がありますように。」という気持ちを込めて、お賽銭(さい)には必ず5円玉を使う。願いのこもったお賽銭を入れるときは、その気持ちを神様に預けているみたいで、少し不思議な感覚になる。

ある日、私は衝撃の事実を耳にした。お賽銭をキャッシュレスで払える寺社があるというのだ。近年、キャッシュレス化が進んでいるといっても、こんなところにまで浸透しているとは驚きだった。

私は、買い物をするならキャッシュレス派だ。なぜなら、現金と比べて便利さが桁違いだからだ。小銭を探すのに手間取ることもなければ、お釣りを受け取る必要もない。タッチひとつで済ませられる手軽さはキャッシュレス決済の大きな魅力だ。

しかし、お賽銭までキャッシュレス、となると違和感がある。「架空のお金をタッチで払う」ことは「5円玉を賽銭箱に入れる」ことと違う気がするのだ。

架空のものと、現実のもの、という違いは私の中ではかなり大きい。現実のお金は回るものだ。昭和期に作られたお金を令和のこの時代に見ることができるのは、発行された日から何人、何十人もの人の手に渡ってきたからだ。何十人もの人がそのお金を使って暮らしを築いてきたからだ。そう思うと3グラムちょっとの5円玉がずしりと重く感じられる。そんなお金に願いを込めて奉納することは今までそれを手にしてきた人たちの思いものせているようで、行為自体に意味があると思う。

経済産業省によると、日本のキャッシュレス普及率は2016年時点で20パーセント程なのに対し、同年の韓国では96パーセント程に及ぶそうだ。また、アメリカ等の先進国と比べても普及率は低い水準に留(とど)まっている[注)]。なぜ、世界的

© 金融広報中央委員会2022

に見ても技術や文化が進んでいる日本で、キャッシュレス経済がそこまで広がっていないのか。私は、日本人がお金に対して、「貨幣」という道具以上の思いを持っているからだと考えた。

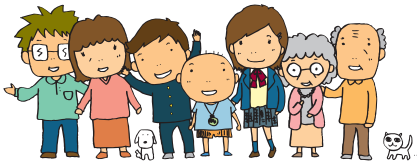
日本の貨幣は美しい。繊細に彫られた桜の花や傾けるときらりと光るホログラム。そこには最先端の技術と伝統的な日本が共存しているようだ。そんな貨幣だからこそ、日本人は愛着を持っているのだと思う。

また、現金は見て、触れることができるからこその特別感がある。私はテストの結果がいいと、ご褒美としてお小遣いがもらえる。封筒に入っているお金を確かめる瞬間はわくわくするし、何より、「努力」が「形」となるのは嬉(うれ)しい。

文化面から見ても、現金は深く生活に根付いている。冠婚葬祭でのお金や、お年玉、お賽銭。これらには全て現金が使われる。季節や人生の節目には必ず現金の存在があるのだ。

このように、貨幣は感情面や文化面などいろいろな側面から私たちと関わっている。だからこそ、将来キャッシュレス決済がスタンダードな支払い方法になったとしても「貨幣」という文化は消えないでほしい。それは、日本に古来伝わる文化を大切にすることにもつながると思う。いろいろなものやことが移り変わっていくこの世の中で、「貨幣」という一つの文化を大切にし、守っていきたい。

（注）
経済産業省「キャッシュレスの現状及び意義」2020年1月
URL　https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/cashless/image_pdf_movie/about_cashless.pdf
閲覧日　2022年7月26日



© 金融広報中央委員会2022